新板
繪入

武侍新話

六

へ伊13
2,398
6

伊へ
2.38
巻 六上

奇傳新話巻之六

離魂為形中尼兵司全伝兼

君子奇怪を語るを恥とせず世人の心を昏迷
さしむるにより予ら造化乃限なき世よ変怪かゝ
や只の其の示に度さるれ邪正とゝなるべし今は昔とな
ね只利満兼胡居冥東寇賊の時改革正しく稍世の
中静なりさ其比武蔵國足立郡に中尼兵司と云る
人ありえ来建武の比朝家れ倍居中尼通利と又
予人いさゝられ過にゝ山地よた遷ゆ〜〜して
童子民とゆり予の目に其孫なり一人の母よ存ゆをに
くし容貌優麗にして弓馬の術よ達し希有の英士

ありし国郡より鳴井橋治とゝいふる豪家の郷士あり。田畑多く持て郎ホヤ郡より加賀へ二百人と養ひ豊饒なる暮しぬ。一子文治と云ふ京都将軍家に扈従し一人の娘あり。珪子と名づけ生れて面貌玉の如く風姿楊柳の乃風よ麗くおとゝ雲鬢ハ落葉の如くに似く女業にもすぐれ弱冠甚だ美麗なる父母の愛寵斜なり。

で女又孝養怠らず。近国甚美麗と聞こえて士農工商の年女たれと慕ひ求ふ。

書春の法橋治文婦婢使ひして野外を徜徉して観音と安亞せ一庵宅にてうく休息あり。庵室の座補廣くして常に游行の人乃宿を止ん

と庵の泉水假山も自然と風景あり。くく慕ふ奥の地にあり。其日ハ客もなく橋治家内よりて一間を備切妻をもつひて汚者を一かゝ実よ一日乃奥より珪子を書ひね珪子ハ婢女一人を倶して庵室のを徘徊して築山を眺れば一ツ乃小家あり小庵又滿洒たり山ハ中ハ岳司も野遊して一人ありて休くに稼よ座ぜり珪子これをうかゝ眉目西るゞざくくあるれば結始くゝ元足にあてたゝずみをるに岳司も風斗かりうんく珪子ゞ吳艶神乃ざくく仏のざくくあるに怨神せ魂飛く思ひ側よ立寄て柔い口しく鳴れ家

の息女にくまし侍さだや某い同郡乃中居長司
あり去年初秋納涼の時始て郡郷とうく郷情
昏着して只再び人ゐを欲して其期あく志よ
せん仏中れ聲と速く我限あさ重情と志く
めんくく其嫁ゆと得て今日えからだ和んて情
念と語くぞんいろの時とろ得く嬉子に我仏と
速んや故よ厚郡にして我仏中と就く嬉子一片の
詞とかりめで我志郡仏よ遂るありとれひよ
堪ぐく嫌懇して中きるに珠子い狗ぐろさく
志ぐく赤面あり居くり一ぐ風ふとたえある
汚志いろの世よりうみきを系せんぐら今

日始て君と人く養意の情志さりにいる乃一夫
道を情式あられて父母の許とうきて生涯君よ
志ぐく其常とくべうぐら死にも悔ふ
ゆあと互乃胸中分節と合るおく袂を連く
海よ松ひよ盟くく夫婦ぞんゆと約せりれ
かく家庭に珠子と存る故浅史ゆきいつるに
ゆとあんく其場とうさりね兵司い家にうて
男に珠子と親とかくあまんさ人階志の約式
あく仏阪歓喜されぞもきと得れ方あく母
に語く嗚呼が娘と郡んゆと語るに母乃
曰我家貧あくぞんくく嗚呼が家豪と抗ぐ

かゝるぞりに言を発して和めとうをゞ脇るゝ
も海ゝぐらゞ云づらに事と対くべかゝるゞその祇
あらんとなぐめ是ね桂子も家よ海りて兵司ゞ使
云ゝるゝゆゝらゞ家よ毎に結んゝく自をて人よ
嫁せめんゝとゝゝらゞ同祇の中辰氏の婦とゝらゞ生涯
の志祇を尼ゞ一人と除ゝく他よ嫁せんゝ自ゞを
むゝ不にゝらゞゝと云ゝるゝかに毎も其着衣の結ゝとさゝん
して橋治よ向て娘の志祇を結ゝきるに橋治笑て
祇兵司ゞ人とゝりを考して聟とせんと欲するゝ
久一尚時豪家の子弟多聟て祇娘を迎んと辰云
司ハ小家にして和敵せざる和よ似ゝり強ゝこれよ

婦女ゝとせゞ親族中ゞてんせざる右多く豪家の
子弟服と結ゞ尼一祇一つの計ゝくゝ素と安ゝゝ
さゝめ氏族とゝつめて祇娘今歳年甫十六ゝよ
他よ嫁せめんゝと欲辰云ゝるに同祇他祇の豪家
芝と考ゝむ者数多ゝり行きと乞ゝつゞらゞゞ
云ゝゞず夫縁よ任せて聟とゝらゝむゞ一今祇農
家よ迫ゝとゝくゞゝ尼士ゝゝく執事にも謂ゝ軍
役も命ぜゝる云ゝらゞゝ馬の道よまゝ尼ゝる人云
て聟とせゞ其ゝよ服と結ゝよゝゝゝゝゞ尾出て
も云例ゝれを屏風よ画ゝとゝく孔雀と云ゞせ
ゝ十間と隔ゝくゝゝと其服代射ゝる人ゝゝを

聟とせんとこころゝめ思ふく其御を思ふこゝて娶すべ
しせやきるに親族一同にこゝを極の御恨にしゝ
依怙の恨と遊るゆゑ以上より出るゆゑ端ゝ
て御ゝく其方式媒ゆゑこゝに達しられいう御不絲乃
人い恥くとゆゑう止其御とゝて誠よ爰ぜんせて無
ゆ者只柳世着爰の三家のこゝゆゑ以治とせて無
司大よ恨び是天幸ゆゑ某一筋と以撰よ爰ぜく
しと云られで毋拝止めて我仕方ありこゝゆゑ橋治
う郷よゝうゝく其書よ對面し以後弓御よゝく
聟君ゝゝのゝす將ゝ今日仔幸其撰よ應ぜて
の連よ加ゝんゆと那よゝくゝる小家にて尚孔の

続を嗚し門よ食の長太よ對て其連中に入ゝんと請
も分とゝゝざるに御ゝゝ奴よゝゝゝゆゝく賢ゝ
と同よ忌ゆゆゝんで胸襟を明しゆゝべしと云法よ
迷ゝるに橋治ゞ書ゝゝよ恨ゝくゝ丈の以ゝゝこゝ實
に鄙ゝと得んのゝゆゝゝ其治ゆゝよゝて橋治
もゝゆゝゝと云るに其ゝ腹と兼ゝ我ゝ夫婦喜ゝび
にゝゝゝと橋治と同ぬゝて結ゝきれで横ゝとゝて
孝ゝよ成就せゝ某今富豪ゝゝる平士ゝゝ
の家い貧ゆゝゝゝる其家京い公族ゆゝゝゝ
無司の外よゝ只依治の服紙ゝけゝ死たあに以
ゆと設ゝゝ娘も他よ嫁ゝるに公ゝと結ゝれば

毋いたつよろこび地よ踊んで深く謝し奉りて
其縁と若るに参司たどりよりて志孔雀に妻せん
と歓喜して其期を待ち居る程よ鳴呼ゞ家よ
て日限とさいめ屋あに射場と拵え八尺の屏風今
地にして孔雀一羽と画しめ彩色を施し一日に映
じて人の眼と射る書院よ親族集り答妻義を
たゝ尺着義家れ一子たゝう桂世氏の嫡子主馬あ
人芸よ富豪れ仕士あり何きも人お整秋とし
宮鎧とみゞき衣裳義を表し一双の好男あ未
屋よ中尺兵司衣裳朴素にして容貌とかゞゝ
清く然として武士よ妻び嘆尺其あり武野鶴

の燕雀よ射ちるに似たり答妻まもく鳴呼家
氏族の禅門立出く曰義く絢ちる射御のさく
ろく其拳ひい若子たり三若次男とたく
に御とたちゝるべしと園とたく一番左巴二番
馬三番兵司と宣りたれで首義左つあ士に式
礼して弓矢と携ちたく左ゞくと座よりり其巴
にたり射礼と施し弓矢とたゞく引たあてたこと
射るに孔雀の肩と射貫く目掛たゞひぬれで赤
面して坐よ成りぬ柳世主馬に仏せひて中尺に
命く釈もあく馳出く矢とたゞひたちゝあゞ引た
ゞりて切て放尺よ孔雀の首毛よたちり見お一同

に憐むべくと嘆くられば柳世子言して首毛眼まち
くきつすす雑らかくれば眼まちくきとたくね
ん大阪今日の撰秋ろんと猛悪て生にうこと
きれで満座用さなしくされと嘆こね二番に中居
無可猛門よ武礼してちづうに座おにたり其場
に脱く射礼とあくうろ弓取て矢とたづひ引ちづり
まうハ満月のざくく身辨押を猛を巌石を要む
に仰くちづくたりつくこれとうあたよ矢ハ流
星れざくくを鳴して孔雀の眼一毫もたづたづ射
抜られば満坐満座の歩後に同音に喝采ち
てちづくく鳴も止くざりられば柳世主馬ハ廣よた

ぬくたづ迎廣うね首義右ハ無可げ義よ三絲して不
剛の如御実よ感嘆よあまりあり東門人とか
ア射術乃倍と学んるつと希ハ尚家れ撰よ意ぞる誰
ら半ハ不よ増くんや某一毫の眼悔ろと精神と敬し
迹ろに氏族も是と賞美し兵司も深く親て仏
後見の猪びとあくく狩弓馬の道と廣んと絢
したうちに於く兵司陸子げ志弧全く遠く是
より橋治ハ舞と重たる情よんく常に会司成
性来ふさめて陸子と面のあり刻とうり時お
つくお馴くと互よ仏情弧ろう婚姻乃時と結居さ
ア好事必其ろに陸廣と生たた其比の弧司芳賀

刑死して天性貪戾好色にして民家の金銀をとる
を取農商の妻子れ類義なる去い物と仰く
奸婦し人民蹴こと憎こころ分が嗚呼娘桂子を双乃
義人なるを妻と偽ってと娶しるに射
御と仰く算のさるまりたるを妻く大よ如こ先中
居色司とあき去として其上よ桂子と我相よせん
とユ丈と凝ーきるに先孔崔と射猟ーたる柳世
主馬幸ありとして密よ新司に編ひ去ぐっく奸
計を密徒して中居色司と謀ーえ東宮方乃魁
首にて仁民とあっく弓るにをー密よ友軍と謀
ー合せ実にく礼と紀に乃企あると新え八方よ

流云して喝こあひるに一大新よ吹きい方太形よ吹
て彼不さに山嗚ちあうしらび首義去つ大よれ
どろひてさつそく兵司ぐ方にあり山ゆを迎ぐえ
来柳世ぐ妻にく新司と密謀して者兵を返逆
して皇秀と浮るれ邪謀あうこと謀りきれば兵司も
大よれどろき首義よ深く謝していて兵由さて橋
治よ諸るに橋治ぐ曰我も今朝これと実ろうちやく
山地とちく他ものに動り居不さ毋らび娘とさつ
そく送るべーとゆ殿と該ー毋桂子も立出くこび
しれうきと告く桂子いをよたまりあ尼二絲
ちくえ上り熱敬眼穿して奥八ゆ来日徇中

擢るざくくあれども左あらねば辨にく嘲ぶ夫婦よ
悲を新いとゐと告くえゆう母とさくめて一不に
退散せんとてよ母思慮あつく汝一刻も早くさう
てきく遊ぶべし遊怠せばかるべ其身と失ん
我身い入間敵よ身あれへえ誠く是を止む
べしべからずして敵司暴悪水罷と紀さるべ我
近郷よあつく其動静と伺く汝に告ぐべと
母子談論とさらめて兵司い上方よりべあつて
旅途よにきり案れざくく敵司流云と出て小吏
と集て兵司と捕えむるに疾退去せるよ訪へ
きれで大よ怪く嘲ぶ使と馳く娘と逐へ

ゐと逐るに橋治言て娘先比より大病にく
国中に於て人ゐとさべよつく婚姻延
引せ不算逐電して行方ざれど娘病益重く去
て命に危さゐあるに医師と中きれで使ちうて
其旨伝前ゐきび恵ゐ醫師女人ときくゆうだ
いと人せむるに陸子い国中に外して医まあく
或い空ゐ知と書し或い中にく偶諾するに仙
たり或い笑ひ或い泣女醫もてべさゆうあく療
方れくべてべさ恐ゐあくざれで空く之ゆう其
旨と逐れば敵司もせんさあく病疫ると伯て
時く其ゆうてと何りむ山時同敵ゐ勇哉刺繍の

工に妙を得る寡婦あり世に鳴り牙家を傳へ来
たる。陸子是を聘ひ其工師を請れり此寡婦一
日為て陸子が病間かしづき家力あり式ん〳〵拙
の序に其の中居氏と為て此病を加る其意懸
怠一去れども中居氏反逆の心あり此地を去る
再び陸子に仕へ来たり其多情の好男他郷に去
てかゝず義人と撰て婦となすべきを君
の意情何乃益あらん強て厳意の二親令老い
玉一人のみ実に掌上の珠玉に擬す一方此病愁
にして倫亡あらば二親乃悲哀何ぞたとへん孤司
累あらとゝ雖も貴顕乃人あり此命に去さらく彼を

嫁さば其の容姿不凡一人なれば此時
栄耀と為にうけてうれ幸のこるべし二親の存
書何ぞこれを強ひあらん其孤司の不忠と恨む
とあらば云ぶらく病を托して去まて式辞し強へて迫
孤を賀とあらまば家豪の義男四人を嫁せんの俗
して地獄と捨ふがおとあらんいうとあれば其乃艶
羅女義実左を猶歩に放を数多の年月を学ひ去
さらざる去られをあり去るに今中居氏一人のみ
にかくれおとく病を外して天の寵愛を仇く受得さ
る一笑百媚乃美姿をとゝるひ奸まを美人孫嬢
の女子にあらい玆人の識と得を悔く悔るあるまで

君の才明有識何ぞ為ふして情を絶つゆあさわざる
と深くこと詰められば陸子長嘆一却して師母の仕云
何ぞうづうを知られ言ふんや自ら公子と志ふ
何ぞ嬉の女子とひとしかるん初い互よ赤墨ふの
情ありといへども鑽穴踰牆の律をもり父母よ新へ
て巖慈の命に従ふ彼と我と分節を合するが
おとく試藝の場にく誌ず年に秀出く孔雀乃
眼を射るく衆歓喜し誌人甚天縁を知るこづう
貞ど守るく死よ撰んく他よ馳ざれ公無可よく志
ふのこるこだ彼ゲこづう我思ふ乃実公我こう得
たり巖慈人情の壱意ゆあさわざれども其公

ひこづうが一をもちて死よ慶とする者に乃ち
好むと仕くえんれば父母乃公我仕くこう大我
志ふるく病に卧に婦道よれるく剛るゆ家且尚
那司のおこと死人面にく歎公何ぞ其任我金ん
久しかるべして其家名を失ぐし師母又ふれよ嫁に
も可ふうと思こづうを憐むよ仕く那て君義を
とうべんと思ふ子に人と壱に道を仕てこづ
姑息と仕く筋と矣ふうむこうに師母に仕て公
ふる時い論くたる一那の人皆こづうを仕く嫁婦
と称せんら嗚呼天ふる我命ふると涙下る者
のおこく床中に困卧ふれば寡婦も潸然として

涙を催し言葉を発するのみにて退き去る
つとさるのごとに兵司は一時乃至丹山乃風凪うれ
ば孤舟を旅途の風糸山河を渡り長崎へ
ゆくのみなく上毛國より沼田の名に因僕の民
とあつまりくるのみと知つくるを求めて其始末
を語るに彼農夫大よ強きをて郎君かのごとき慈
かるのごとくなるのみ小地ゆくども食糧とぶし
かるべしと安んじ常日のごとく時節を待のみと貞
固のごとくに兵司も公務つきて農夫が家の
側に小室あり去るを以て居ることあ
て日と暮しまるが胸中頗更も怪ずの浮さ

とつるのみなく快くとうてたのしあるを以国乃人性
剛強にして常に殺伐を好む一郷の任侠共中居
が為に伝式者として武体を誇んとに兵司これ
を聞あり彼小伏侵せべ又多殷あるべしと思ふの
應答して撃剣力量に業を施し見るに皆に
庸不測の妙術あれを任侠ともに服恭敬し
所と為びされよ侵ふの他のみ其剛強の性伏
るを示によつて実志を為に也又寡しかくはずと
くして日月を送るの百日に及びきるに一日中秋
の夕名月訪ひ来る人もなく秋色を賞して世と
絶し母の愁苦を慰しまを秋月の傷るを示ふきを歎く

陸子が病と例へ変て其可否いうかるゝ彼是方す
にせまり覚へず双眼襟と湿して伏ちづこをるが
うづうづ及ばとして其迷昏と悩惚し黄昏に及
びて扉ととぢんとゝ立ぬるに人見急にして其形
いさぎよにんぐんざれども婦人の見きにして間あく
駈ゆると睦を定めておれとこんるに陸子にたぐひ
かれば嬢子いづこくらきるに無司おうにありとい今
きり生てまにちぐり又是憂病まあうだやと
教とるあつく帰法とるに無司も怪しこ喜へて
使つく内まいり始更とうえくいんげてはあく来
られしと背神と拝しくゝ辛るに陸子涙ととめ涵

さるに実ひにして吏君まちぐひかしうづうづにと
うきてより悲法とるひ二夜二日まより人すを知
らず昼へ絶日夜へ毎宵君まさぐんく奔走し辛
苦艱難を絶るひを覚へ附らしていい父母に驚らされ
て四家とあり食事とかしく又眠るがおとく君乃
側と離れず故ま角師目ばかるも又義幻らとあ
やしひる邪司乃奸悪あるうづうづ祇得んとしく
先君と落しいるおうれどもうづうづ病ま弥く醫
師又奇病として茅方とドさぐ葦に虎にと遊ま
たり迎来稍紅家四しく昼夜とうづうづ病ま治さ
まされにようくく父母一僕一婢とにきて密ま自と

仕地より来りし婢僕盤纏をむさぼりて義別自を
捨て去るこゝろ道を去るべきよりせてさてに
たり思ひて者より豈天縁あるべやと悲歎
乃流云司と称む兵司甚貞節志操を感じ我今
さてに去て生活又安しきこゝろく夫婦仕て行く
古郷好人の宅を式徒ぐし珪子喜ぶ去るに
行とる又愁んと其夜彼農夫より次第を語るに
と打く奇縁あるうれと大より感喜し仏を尋く
奉仕さるに夫婦も大より仏と安んず兵司い任使の
使と働と徐し一郷の城雑を平夷し珪子い徳裁
を仰く農夫ら書を補く仏儀正かりれい老

美男女兵司夫婦と云信して去ること貢ぐるに豊麗
を尋ねるとも苦より父母にくれく一仏を屬て
子の子一月い仏さ日いるく若んぞ年九く望春
に及び春色閑にしく沈海の間既より一歳乃為老を
過せり初夏より入間郡の兵司が毎仏不孝ね
有て夫婦より奪ひ珪子が志を感じ扱しも郡司
芳賀刑部貪逆暴政訴あるく官領家より命下
つく死罪より行れ新郡司長尾氏芳賀が邪と仏く
去る法と悪くあるたるく柳世主馬が諫言を以
て汝と退去せしめたるのあるいて柳世も退逐
せらるを汝もりて次第還信し明年にも行乃さる

あく息女と婚姻せんとす。改法嗣らるべき人を
たずねんとて、早く呈を召しあつめ、首座たるより
中末にいたるまで使ひ行んがために、あれうと諸ら
い兵司踊躍してよろこび珪子もよろこぶこと人其愁
あるべきありけれど兵司其故を問ふに珪子涙ながらえ
ずこうこう父母の命を受て浮屠と成ぬと。
と笑さる斗にて婢女一人を召連て来りね婢盤
纏をむさぼりて自式於て丈夫を逢ぬ
ばかりを述て父母の命を待ずしてまづ自式
止め盃のつがるんとをもつて勿論なくもかりに偽り
まるかの所式をれく悔るあげきられど兵司が母是を

あくさあて私通の律と犯して好丈夫と意くさとる乃
類よりあるべき書こうくまと是と墓の其志行ぞ惜べき
使ひ行く其志と述べ哭牛ぬ不乃納得あらんか
疑ふ〜といひるに兵司も同心して酷ふ度分
さとあく合中れ使去ぬこと人来りて式中式なく仆
きも力と落し今師より別まく式と泰山の稲と
先ふげさこうこうとれども今度古々是を信ずる人る
の盛事ありうたるに師云猛しとこうくも婦人と使
ひて爭執乃世の旅途去危し式く墓固してたる
だの方まで送ってまこうんこうよ兵司その至
誠と感して去こうべ辞退あく執入るこうにたる

よろこんで立ち帰り、同じく五人旅途の用意して、駕籠をつらねて女婦人を乗せ、めざして中山道へ出で、武蔵へ旅立ちぬ。其地人々周章して奴の外騒ぎありければ、兵司と共に、よく鳶司の悪逆を糾ぐ。民人実に父母にあるがごとし。今日、新司、猶ほ出でざるに、兵司、ひらとく暴悪を糾し、たる去皆追逐せしめ、新司と面あてを見て、野武士と結ひて、新司を取巻こうとぶ法して、地よりも人数を出さんと諸ふ。兵司、さきどりして、悔き奸臣も賢なる新司と折柴をせざるの勇を、我が中居兵司、新中に居住して先新司のために退けて他国に住居し、今を住の鳶妻子と右連さり、我が新司の危難をとらひ、条々見の服と射撃する英雄なり。指揮のいかに行とり、悪人数百人、斗さらり出れば、毋書と村長に托し、人と左右に引連百人と引率して風揺して急ぎ行ぬ。山村新司、猶ほ出でく谷間に廣場に座して上下糧食を列ひ休息あるに、城佐谷口に戦切あるに、思ふ人数とうとくこれと射る新司、大なる

怒りて打破らんとしたれども岩山登るべき様なく徒路をふさぎ兵士を矢よ射てくめんと兵士卒皆幕を打席と張りて暫時これと防ぐ事なくいくどもせんりきをつくしていくさ

せんとすれども不レ中居合司人数と卒て新羅司乃恩命にしたがひ中居兵司を使ひ兵士にして新羅司の急難を救ひ遠ひよまりたる一揆衆早く退べしと呼

びたれを一揆の大将と見て手侍大音あげて推参

ある詞に新羅の孔雀の服いを射損ずるとも決げ胸板い我

拳れ用ふまりと切て放て矢を司げ眉間と射て

あるとを取れ取かくと笑ひ和い柳世を引るる

より弓勢い強く引絞せよと語

と射る矢に柳世を中て脳くだけて倒れたれば

一揆衆肝を消し勢衆柳世を射くるを不と矢つぎ早に射

る矢一ツもあざ矢なく引るに十騎人枕をあら

べて射数一をれば引とつらぬき二回よ迎射るを

五人の使矢百人の雑卒退治こと数十人と数傷か

一をれを弱る奴衆四角八方に迎矢ふる新羅司毒蛇

の口式すねられて大よ悦喜あり兵司とをく招きて

厚く褒賞あり又士雑卒に恩言とし一日に功

を賞せんと立場をきる時士卒共称とあぶくい

うある立あらんとたてられきべ兵司進んぐ某

陣法と押人あるべとと引さげり列と採くるをひ

紀よ恩人教仏と安んじて邸よ泊りて又高坂よ紀
湖あり〻く暇を給はりつゝ百人の幸を祝し又士民新
て母妻とちゝらしめ其外い先首薮右つゝ家にて
つゝを住の言と逐殷〻深志の謝と訓えきるに
首薮天地よ歓喜して座布〻請ぜられ会司立入
て今日新司猟場の要某為り合〻酌ひ系〻せ
邸まで送り系れりと次第を語るに首薮殷を叩
ひて大〻感喜一を住の初大功あり是吉兆なり嗚
井氏に〻く共兄を伯半早天の雲霞のごゝ〻骨足
ゐぐら先到りて待うえのくゝいるよ兵司も許諾し
てきんゝく伯井ゞ家よ紀〻中居兵司呉今代度の

是住よつゝ系れゝ中と告られば橋治夫婦顔倒し
て馳出多武承て喜びむせんで言と吐るゆあるに
無司四還住の言に〻く家門と使ひ系る道に〻く
新新司の危難をよてひ見ますで系ゝひ系るゆ
と逐られで橋治よりゝびて凶ことに一附乃英雄か
て代功よりゝく数日の汚名も杜のごゝ晴れ〻し
娘珪子母と別れてくよりゝ病よ卧て人ゆと言に
花洋ゝて心乱あるゆゝく〻く日夜偶語するど
ゝゝて言古ゝ言ゝ紀のごゝ〻系るゆ話よ一年に
乃ぶ言られども時く食事と為に〻よりゝく全粋喜へ
ぜゝゝ父ども全快の祝ゆ〻と涙と共よ語りをれで

兵司大夫迷惑して某と上臈よりとく所作日にて
幸に珪子某と慕ふて某ふたりの夫婦となりて一
歳を近く氏度母と共に住ひ為て新司の妻に
つく鴛巣の駅に托し是を泰山乃恩とのして
告げ〻を受れ罪を許し給の侍に成て某が書
とかゝのつ仇の幸うとれよとうと低頭仰伏流
し給ふとられば橋治夫婦仰天して陸乃鶴の
武功と笑く感歎する辰も乾ざるにいろうれで形
のすぐれさ無根の言を迷のみや我娘い為新のごと
閨中に邪く彼而よありいうんで来く上乃くを受る事
と得んやとうた兵司もくるかりあやこれどろひ

て奇怪ふく某疑ふあるこれども伊達珪子乃閨
中に入ふく其ゆうとと伺ひんとよ橋治も仏行て
女年多情狐狸の類娘が形とかして見を迷せも知
だうだ兎角娘とうんを其仏と定めひるに忘れ
と閨中に使ひて入るに珪子閨中に使く眠ると
ひとり西同容姿まの珪子ありられで父母と共よ
急ぎ度和く出某母と共よ連れる珪子いさらあ
やしたるかく此地のうと就よ能見せう今とか
又彼と是と疑ひまに知る忘れども霊中乃珪
子い始終父母の側よあり一毫乃疑よだきとかと
れで使ひ乃る珪子妖怪ら行きにも近人とたら

北尾紅翌子齊画

い一母と共に出家し呂崎偽れのごとくいつ
らんといつて橋治夫婦も此謀を極よりたちまちに
其妖怪と成さんと云司に向書を認さを教人を遣す
さて城さり尚家信作の老智識此節居れると
招きて右の旨を語りきるに元傷も怪しき呂書せて
信銀多さぞんべ某屯に其怪を見さんと有れば
人も伝わらつき無司に湯を乞を食ひと進め給る
附給菓乃駅より中居家乃宅券ありのよと告れ
で無司急ぎ立出く母と珪子と使ひて座布人ある
に橋治夫婦さんとこんるに同じ方ある珪子ありを
さべのされて祠乃無司母と珪子が園中に那一

居ると私語られば母も驚怪として同さり珪子父
母の前よりお伏く常くのさべき教よてむき命を
待ぞ〳〵無司乃よ仕しまり不孝此上なしとて人ども
行年の慈悲を以て思免あんく永く中居家に箕
帚を取しめのくて泣前へられば父母も胸中探るごく
不便と思へど我娘に国中にあり黙止して互に面を見
合て詮方居るまりよ園中に拘育して立出る人あり
づれも驚きさんれば一歳病に伏さる珪子さづりに歩の
出さり父母慌記く抱して坐せしるに二箇乃珪
子相對するに毫厘も違ふなく人喜び満面
に溢れく互に寄り寄て抱くぐごくあん

きるゞ忽然として一辨となり一人の珪子のこゝろ
樣をあらて一産たゝ騒さいよく益怪こきるに珪
子ハきるい自盜女人となり甚奇怪こゞゝとゝど
も若ろ〳〵いろるゝとゝ事とゝこゞ思ひにこゞ
かゝ病ゝ伏くゝよりて俄倒して常に夫君の側に在
ゝるに実ゝ霊中と出くゝ上昇ゝ約其ゝ夫婦となり
て一歳ゝ近きゝゝ歴然とゝく高れゞ又園中にあり
くゝ時〳〵食をかゝ父母と辭せゝゝもいさゝらもゝ
ざるゝかゝ志ゝれゞ病中に魂となれて形となかゝ夫
君ゝ後ひきるにやと迷ゝるに何も潔く安坊かゝ
きるに老偽い初ゝう默然として居ゝゝしゝ呵〳〵と

て笑ひ人間の一仙一景のせまるゝいゝるゝ妙ゝもゝ
ざゝゝいゝゝかゝ見天縁ゝり庵去ゝ清河乃張瀓
少ゝいゝる人の娘を倩娘ゝゝゝ王宙ゝいゝる者をゝゝ
て魂ゝゝれて形ゝかゝ子里ゝゝゝてゝ王宙と
夫婦ゝゝゝ数年れ後女人張瀓ゝ家に来りて
倩娘い数年病ゝ伏くゝ園中にあり夫婦の来るを
ゝゝく喜ゝく馳出二人合掌して一人ゝゝり永くさゝく
きるゝゝいゝまにゝゝく文人騒客甚奇遇を唱ゝく
詩賦ゝ述今日れゝまにゝ刎合にまんゝく子孫繁栄
の徴ゝり志れゞゝゝむゝゝくゝ又怪しむにて
不ゝり早く婚姻ゝく好ゝゝゝ永く結ゞれゝゝ女諸

ありれど一座歓喜し檣治夫婦と娘とをうろう檣
治やきるハ兵司要位あるく雇翁造営間あるべし
母子先私宅に逗留あるて善事をとゝゆるに
志うれ明日親族と集めて兵司娘ゞ婚姻とゝのひ
聘懐の志孤を遂さるべしとやきるに兵司ゞ母檣治ゞ
妻夫よ娘び云司姪子ハ涙よむせんで海山の恩謝
とかしたり翌日大宴を設を親族智音多くあつ
まり婚姻乃儀式厳にして兵司姪子礼服しく姿
容とかざりきるあくさて人間世の人とも思られど
只孫玉のお映ざるに似うり満堂其奇遇羨歎相
當せるを相賞ゞお賀しく意よ階老の志孤をとゞけ

つきり智識の老僧其席にあるく永く嗟嘆し
意よ詩を賦して後末の詩とした

倩娘別後憶良人　千里芳魂有形親
珪女唯今同此怪　一雙情感自現神

志ゞくあつて孤司よりたゝえく縁倉皮領家中
兵兵司に命令あるべきさちあるく早く在縁金
あるべき設ヤ波し旦吉兆にく家たりふるあき間
云あつて母子唱ゆ夫婦ともよろこんで紙粧ゝ
ゆうにうらうく縁金く糸勤あるに官領満兼
胡呂對面あつて其ゆ武藝に達し一揆京変戎
ゆして孤司意雑にわちあるに武勇を以く城を

うらとり弘目とてらひしはてゝ感賞あゐて
京都の軍家へ奏聞ととゝげ勅勘免許
あつて永く武家の被官たるべきよし天子よりゝ
くだの軍家よりさのゝびゝ上聖國ゝまわて二子貫
の領知をたまるむよ余ありれで兵司はきゝん
で恐謝し不肖の某只の軍友領の恩恵によつて
かゝれおゝゝ重恩と敷まるゆ武門の眉目ゝ上かし
や執事兹司に礼謝と述ゝく一旦武及足之弘よりゝ
彼地より采地よ移りべしと成いそ成えゝり先弘目
の邸よりゝきれで弘目出ひゝくゝゆんぞんに賀詞
と述るゆ中居も為恵と語りひゝくゝよ弘司乃吹

拳と謝して帰れ我が家にたゝまび氏族和音皆門外に
むゝひ出ゝく使ひ産布に毎年毎にさゝりありゝ
我夫婦親族一同よ歓喜しくされより日毎よ賀筵
と開ひて祝事とたくせり扨上弘よりゝ弘ゝひき
しる五士弘目よりあつくたまものあつて中居が発
弘を云ゝゝ居るに五士天地を弾てよろこび一同よ
其居ゝゝんゆと語よ陸奥に実意あれで兵司も
大よ感喜し氏文士を家司として夫より帝笥と求
むるに日夜望ゝ来る者多く半月餘よして人数
全くゝゝひる扨帰我夫婦よ限ゆこと大恩弘謝
し母陸子と使ひて領知よ入ゝく鍬と撫へ家士とも

げまし百姓とあられを改まり正しかりきれど人民多き
さきさぐひ目出度学べきをとあん嗚呼奇怪に邪
正あり世怪正とをんう知るべからず不思議なりしるべ
其なり

奇傳新話巻之六終

根郡物

平賀源内著 全五冊 通俗醒世恒言

富産飯盛著 全五冊

風流志道軒傳 同作 全五冊 瀧本三十六歌仙

恩純先生著 全

勇士烈婦奇傳新話 豫臺隠士著 全六冊 女丈夫畫図 全

柳堂奇談風物帳 森羅万象著 全五冊 夢合延寿大成 全

寒温奇談一二草 振鷺亭著 全五冊 狂哥宝合記 全三冊

物語草紙 全五冊 狂哥二樂物 全

いろは文故傳 振鷺亭著 全

風俗女露一代記 日作 全

東都江戸橋四日市

書肆 上總屋利兵衛板